

Workshop on Altaic Formal Linguistics 17 参加報告書

相関基礎科学系 修士2年 森一

「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」をいただき、2023年9月27日から29日まで、モンゴルのウランバートルにある National University of Mongolia で開催された Workshop on Altaic Formal Linguistic 17 (WAFL17) に参加した。このワークショップは、アルタイ語族に関する理論言語学に関する研究発表を行う学会である。アルタイ語族とは、日本語、韓国語、トルコ語、およびモンゴル語などを含む文法的に類似している膠着語の総称である。これらの言語は統語（文法構造）的にも意味論（論理構造）的にも共通した性質を多く持っている。WAFL17は、これらの言語の理論言語学的研究に関する交流を行うことで、お互いに研究を発展させることを目標としている。

報告者は、韓国語の選言小辞 *na* の意味の分析について発表を行った。韓国語で等位結合に用いられる小辞 *na* は、結合されている複数の語のうち最後の句に *na* が後続しない限り (e.g. NP₁ na NP₂) は、選言 (OR) を表す。それに対して、最後の句に *na* が後続する時 (e.g. NP₁ na NP₂ na) は、日本語の「NP₁ も NP₂ も」に相当する連言 (AND) 的表現になる。選言と連言は対をなすという意味で反対の論理的概念であるため、この二つの概念が同じ語で表されることは論理的にありえない現象である。この *na* の意味を、日本語の「も」に対応する小辞の意味に関する先行研究に基づいて分析し、発表した。

ワークショップ内では、実際に韓国語の *na* や日本語の「も」に近い働きをする小辞の意味に関する発表が複数あった。特に、University of Groningen の Lisa Bylinina と Lomonosov Moscow State University の Peter Rossiaykin による発表ではトルコ語のデータを元に日本語や韓国語の同様の小辞に関する研究を発表しており、コーヒープレイクなどで研究の話を深めることができた。

ウランバートルの街の雰囲気は、東京と似たようなビルが多くある反面、広場や道路の様子などが東京とは大きく異なり、異国的であった。モンゴル料理は羊肉を使ったものが多く、日本ではなかなか食べられなような食事も経験することができた。研究を発表し、発展させる機会に加えて、このような貴重な文化体験をする機会を支援していただけたことに感謝している。



〔写真：〕 会場である National University of Mongolia のキャンパスの前にあるチンギス・ハン広場。奥に見える坐像がチンギス・ハンである。この広場はウランバートルの中心であり、周辺には公的施設やオフィスビルが集まっている。夕方以降は人々が多く集まり、キッチンカーなども並ぶ憩いの場である。報告者も他のワークショップ参加者と夜中にこの広場で話をして過ごした。